

古事類苑

遊戯部 十一

煎茶

煎茶ハ其起原詳ナラズ、高遊外ヲ以テ中興ノ祖トス、遊外ハ徳川幕府ノ中世ノ人ニシテ、世ニ賣茶翁ト稱ス、其事ニハ水品擇芽煎法等アリテ、一ニ支那ノ風ニ摸倣シ、其器モ多ク支那ノ製ヲ用キ、簡素幽雅ヲ以テ主トナルガ故ニ、文人墨客ノ輩多ク之ヲ玩ベリ、

名稱

〔書言字考節用集服食煎茶活法見二

〔類聚國史帝王三十一〕弘仁六年四月癸亥幸近江國滋賀韓崎、便過崇福寺、中大僧都永忠、手自煎茶奉

御施御被

〔江家次第第五〕季御讀經事

上卿一人著南殿例天喜四年、三ヶ日、毎夕、座侍、臣施煎茶

〔木石居煎茶訣下〕今日の茶は、泡茶、淹茶、沖茶の三ツにて煎茶ならぬに、なべて煎茶と唱ふる、當らぬやうなれど、矢張煎茶と稱して苦しからぬ也、かゝるためし少からねば、殊に手近き例をばいはんに、たとへば論語卷の一卷の二といふ如き、こは古竹簡に文字を彫り付、韋にて是を綴りまき置たるよりかくはいひし也、又中古になりては、絹に文字をかきて是を卷置たるが、紙の出来し後は、今の如く本に綴たれど、猶古稱を唱へて、卷の一卷の二といひ、竹簡が紙にかはりても、脱簡など、もいふの類煎茶の適例ともいふべし、さればだし茶にても、一煎二煎と稱するを笑ふ